21世紀への遺産

熊本の文化財を語る

横顔美しく――。

緒方　惇（詩人）

私がそんな橋を見たのは、砥用のこの橋がはじめてでした。地味だけれど、横顔が美しい橋でした。

じつはそのとき、私は母に置いてきぼりをくった直後だったんです。昭和十九年の秋口。そのちょっと前に、東京の空襲をのがれて、父の郷里である甲佐へ母と疎開して来ていたのですが、幾日もしないうちに母が、「やっぱりお父さんだけ空襲で死なせるわけにはいかない」とかなんとかいって、また東京へひとりで戻ってしまったのでした。やがて私も、後を追いましたが…。

そんなわけで、砥用の級友が私を慰めようと案内してくれたのです。でも、ほんの少女だった私は、すっかり感傷的になっていたのでしょう。砥用というところが、駅も町も、山も川も橋もみんな、静寂な青味をおびた緑のくにに見えました。

なぜかこのごろ、その雄亀滝橋をよく思い出します。この橋をつくり出したのが、名石工の岩永三五郎だと知ったからかもしれません。そして私は三五郎に、よいもっこすを幻想しているのです。

〝もっこす〟には、ずいぶんと困ったもっこすもいますよね。私の父も、多分そっちの部類でしたし、もしかしたらこの私も、かも。

でも三五郎さんが、もっこす魂を自分にかけて、どんな難題にも屈せず、あくまで石工としての意地を貫き、創意をきわめたもっこすであったとしたら――その地域なりの用途をみたし、用の美まで持った、熊本の歴史的な石橋は、誇りうるもっこすの象徴的な産物なのだ、といえるのではないでしょうか。そして、なんとすばらしいもっこす文化でしょう。

そこに合う石をひとつひとつ、山から慎重にきり出してくる――それを工夫して積み上げる――その石同士の重みで橋を堅固にする――人間が架ける虹！

詩を書く私は、ひそかに石というところを〝ことば〟にかえ、詩の理想を重ねて、かつての母恋いの橋を恋うているのかもしれません。

雄亀滝橋（おけだきばし）

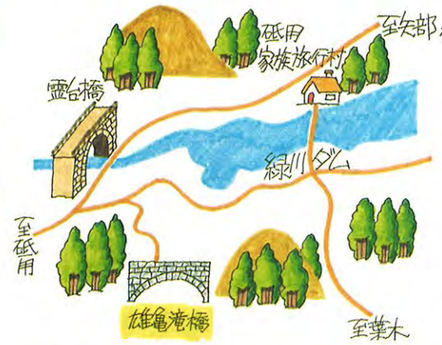
偉大なる、もっこす名石工意地が架けた〝この橋〟

砥用町石野にある雄亀滝橋（みけたき）は、用水の柏川井手を通すため、文化十四年（一八一八）完成した、長さ十五、五メートルの単一アーチを有する水路橋で、昭和四十九年、県の重要文化財に指定されている。

砥用手永惣庄屋三隅丈八が施主となって、種山（現、八代郡東陽村）の石工、岩永三五郎（通潤橋や皇居二重橋を築造した橋本勘五郎の叔父）によって築造させたものだが、これにより当時三十三ヘクタールの水田が開かれたという。

雄亀滝橋は、現在でも灌漑用水路橋として約二百三十ヘクタールの田畑に給水している。

また、雄亀滝橋の送水技術は、安政元年（一八五四）築造の国指定重要文化財、通潤橋の送水方法の基礎になったといわれている。



心のふるさと民話とわたし

九十九の谷

●感想文
宇土市立花園小学校
6年　山北　由美子さん

●感想画
6年　西岡　和紀くん

「九十九の谷」　あらまし

むかし、鎮西八郎為朝（ためとも）という、さむらいが木原山に住んでいた。木原山は、今の宇土市花園町にあって、別名雁回山（がんかいさん）とも呼ばれている。為朝の左の腕は右の腕より長く、弓をとっては日本一だと言われた。それを恐れた雁がいつしか山を避けて飛ぶようになり、この名がついたという。

為朝は幼い時から、力が強く、勇気もあったが、元気がよすぎて、乱暴だったため、十三のとき、父為義（ためよし）に、京から九州へ追い出された。が、九州でもますます勢いをつけ、ついに総大将になった。

そこで木原山に城を築くことにしたが、大変な仕事である。すると、どこからか一ぴきの鬼がやって来て家来となり、城づくりに大活躍をした。喜んだ為朝は、何かほうびをやりたいと思い、「金銀財宝はどうか」と尋ねたが、鬼は関心を示さない。「それでは気がすまぬ、何でも申せ、かなえてやるぞ。」と為朝。鬼はしばらく考えて、「人間を食べたい。」といった。びっくりした為朝は断わることもできない。そこで「この山に一晩で百の谷をほり上げたら…」と条件を出した。喜んだ鬼は勇んでほり始め、夜中には九十九までできた。これは大変と、あわてた為朝は、ふと名案を思いついた。バッチョがさでにわとりの羽の音をまね、「コケコッコー」と夜明けを告げた。これを聞いた鬼は、谷を一つほり残し、残念がりながら立ち去った。木原山の九十九の谷は、こうしてできたのだという。

この話にでてくる鎮西八郎為朝は、あの鎌倉幕府を開いた源頼朝のおじにあたる人です。

そんな地位もある為朝が京から九州に追い出されたのは、強すぎたせいです。しかも、右のうでと左のうでの長さがちがっており、とても弓のいやすい形だったそうです。

「ここから弓をいて矢がとどくようでは、城はたてられぬ。」と自分で調べたりする注意深い人だったようです。その中で山の形がどこから見ても同じという木原山に住まいを決め、後に雁回山という名もつきました。為朝のうで前に雁も飛んでいられなくなったのでしょう。

為朝は雁だけでなく、おにとの勝負にも勝ちました。失敗したおには無念だったでしょうが、為朝はやはりちえ者だったと思います。

山の近くを通る時や、祭りの時この物語を思い出します。